

目次

禅海浮沈七十年

少年時代	三
出生	三
初めて故郷を離るる心境(一)～(三)	三
第二の故郷	三
天狗 <small>てんぐ</small> 八人の小僧	三
発 <small>はつ</small> 心 <small>しん</small>	三
腕白の極点	三
円覚寺へ	四
修行時代	四
青年時代	五

愚問愚答	二五
わがまま	二七
少年禅家の苦惱	二八
煩悩	三〇
高僧	三三
禅心	三四
魔境	三七
禅の味	三九
悟	四一
暴	四五
仏法の大意	三七
禅	三九
禅と教外別伝	四三
生きること、死ぬこと	四五
靈魂ありや	四七
野狐禅	四八

慈悲平等	四九
工夫	五〇
坐禅の目的	五一
禅の修行	五二
見性即成仏とは	五五
公案	五六
人生観、世界観	五九
禅談	六一

平等心是れ道	六一
茶道と禅—豊臣秀吉と利休—	六三
廻乾就湿の恩	六五
持ちつ持たれつ of 世の中	六七
参禅者のいろいろ	六九
人間の偉さ	七一
実生活に禅をいかにして生かすか	七三

建長寺に入る	三五
紛々雑々	三五
天龍寺へ	三六
女 福	六一
女文字の手紙	六七
偶然の結婚	七〇
再び修行の道へ	七四
心頭滅却の行	八〇
捨て身の戦法	八四
悟道邁進	八八
恩師碩応 <small>せきおう</small> 禪師遷化	九五
人間本来無一物	九七
運・根・鈍	一〇三
貫道 <small>かんどう</small> 禪師遷化	一〇八
天源院の住職となる	一一〇

管長時代 一一三

建長寺管長となる	一一三
人生の三大要件	一二六
第一、人事を尽くして天命を待つべし	一二八
第二、人の弱点に同情をせよ	一三〇
第三、人格修養の三分別	一四八
人間味	一四九
古人の格言を記憶して	一五三
禅学入門	一七三
講禅余録	一七八
曇華余滴	一九六
修養は大業の本、艱難は成功の母	二〇六
最大の急務	二二三

愚問愚答 二二五

禅の修行は場所と時間を選ばず	二七三
死に対する平常の心がけ	二七四
正念相続禅——水戸黄門と心越禅師——	二七五
最高至大の武器	二七七
優等の忘れ方、劣等の忘れ方	二七九
禅と堅忍持久の精神	二八〇
千里の堤防も蟻穴から	二八三
放下の境界	二八五
益なき修養	二八六
坐禅と修養	二八七
大悟	二八九
口耳四寸の学——生兵法は大傷の因——	二九〇
聖胎長養の要	二九〇
大石良雄と僧良雪	二九三
二人盲目	二九六
自由と自由	二九九
健全なる精神に健全なる身体宿る	三〇一
日本国に生まれたること	三〇五
昭和の今日に生まれた幸い	三〇六
活学せよ、死学するなかれ	三〇八
正直の頭に神宿る	三一〇
下に通ずる心	三一一
不能の能、無務の務	三二五
豆腐買い問答	三三八
修養と壁書	三三一
編跋	三三〇